

# 太鼓の風景

[VOL.21]

浅野昭利

民俗芸能のフィールドから踏み出した太鼓が、舞台芸能化して早や四十年が経つ。当時はがむしやらの熱情を体ごと太鼓にぶつけていた若き打ち手たちも、そろそろ還暦を迎える年回りとなり、打ち出す音色になんともいえない円熟の味わいをにじませるようになった。四十年という歳月のなせる技だろう。

そんなことをしみじみ思っていたある日、東京で「TAO」の公演を観る機会があった。大分県の久住高原を拠点に、国内外で意欲的な演奏活動を展開し、これまで巡回した世界七カ国・四〇〇都市での観客動員数は累積で五〇〇万人近くにのぼるという団体だ。前に彼らの舞台を観たのは何年前だったか。お定まりの法被姿で、どこか物足りない打ち込みは、いつも私にながしかの不満を残したものだ。だから正直な話、今回もそれほど大きな期待を置いていたわけではない。だが、私のそんな思いは見事に裏切られた。「これが太鼓だろうか」。舞台上で演じられていたのは、何ものにも縛られることなく自由奔放に息づいている太鼓、打ち込みの鋭さや打ち手のパフォーマンスはもちろん、チームとしての一体感や照明・音響・舞台装置・衣裳・ステージの持つ場力<sup>ばりよく</sup>までも包括した総合的なエンターテインメント。一言で表すなら「驚異」とでも言うほかない、おそろしく進化した太鼓芸だ。

その終局に見えるのはただ一つ、いかに観客を楽しませて満足感を与えるか。舞台上立つ者にとって至極当然の目標が、一分の隙もなく徹底的に凝縮されているのだ。矢張り早く展開する舞台を観ながら、私はあらためて和太鼓の世界が確実に変化している現実を実感した。

それについても、こうした先鋭的な太鼓が出現するまでの道のりに、先人たちの並々な努力があったことを忘れてはならない。一九六〇年以降、『御諏訪太鼓』や『大江戸助六太鼓』『御陣乗太鼓』などがテレビに出演したり、『日本文化交流使節団』として海外に遠征公演し始めたことで少しずつ太鼓に光が当てられるようになり、七〇年代には各地に伝わる民俗芸能を主な演目として『佐渡國鬼太鼓座』が旗揚げ。主宰者の田耕氏は三尺八寸の太鼓を舞台正面に据え、「まずは太鼓ありき」の舞台を組み立てた。その斬新な表現を実現したのが、当時、鬼太鼓座の座員だった林英哲氏。それまで誰も体験したことのない太鼓の正面打ちを舞台にかけるまでに洗練するには、身体の型にしる、打法・リズムにしる、どれほど多くの試行錯誤を重ねたことだろう。また、秩父屋台囃子の地打ちなどに使われていた附締太鼓について、見た目の美しさや機能性を追求した鉄製の座り台を考案して舞台演奏に導入。パチにもテーパ<sup>テーパ</sup>を加えるなどの工夫を凝らした独特の音づくりで、石井真木氏作曲の『モノクローム』をはじめとする名曲を世に送り出して附締太鼓の奏法を広く普及させた。

その後、ソリストとなった林氏は、『モノクローム』や連作の『モノリズム』を引き金としたように、音楽としての太鼓を追究。作曲家の細谷一郎氏、能楽の『噌流笛方である』噌幸広氏



「TAO」のステージの1シーン

とともに、太鼓に旋律を加えて流れるような楽曲を生み出した。それは当時「一二三、それっ、ドーン、ドーン」という土くさい演奏が当たり前だった太鼓を聞き慣れていた日本人には耳を疑うほどの驚きで、太鼓の新しい世界が開かれた。

ほかに数々の曲折を積み重ね、そのすべてが今に通じて現在の太鼓芸能のベースとなっていることは間違いない。そうした四十年の歴史をつぶさに目にしてきた私でさえも、今回のTAOの舞台から放たれる圧倒的なエネルギーの質量は衝撃だった。

古今東西、さまざまな芸能が時代とともに変化し、進化し、新たな旗手の登場によってさらに変容が遂げられてきた。民俗芸能から発し、その伝統を舞台に反映させるどころからスタートした太鼓芸能も、折々に新たな境地を開拓し、そのたびに「これが太鼓か」とばかりに聴衆を魅了しながら今に至る。今後、また改革者が現れ、より進化を重ねた太鼓が出現するかもしれないが、ともかくスタートから四十年。ここに来てようやく太鼓が紛れもないエンターテインメントとして、世界のショービジネスが集積するラスベガスでも引けを取らない作品として上演されることに、太鼓にかかわる一人として、また日本人の一人として、大きな誇りを感じている。そして、四十年という歳月によって育まれた太鼓芸能の成長を、あらためて見つめ直している今日このころである。

浅野昭利(あきのあきと)

財団法人浅野太鼓文化研究所理事長、1947年、石川県白山市(松任市)生まれ。慶長14年(1609)より続く和太鼓製造技術を継承、とくに三尺以上の太鼓製作については独自の技術を持ち、全国の神社仏閣、太鼓チーム等に多くの太鼓を製作する。万太鼓文化の振興と発展を目指してさまざまな活動を行っている。「たこやい」のほか「はじめの太鼓 よーいドン!」和太鼓がわかる本「太鼓という楽器」など、太鼓関連書籍も多数出版。